

等の諸寺長老宛には、或は『悉期對決之時』とか『所詮欲遂本意、不如對決』とか乃至『早集一處而令遂對決』給。日蓮命「庶幾處也」とある。宗論對決に對する日蓮の切なる願、推して知るべきものがある。

(15) 日澄(110707)の『日蓮上人註書讚』に左の文がある

遊學第三

其後志遊學而捨^三築於千里^三、欲修^三諫^一而負^一笈於諸^三藍^一、先於^一鎌倉^三學^一淨土宗^三龍化院^一佛還來^三本山^一寺僧等數^一之。大阿臨終^一狂亂呼喚^一、驅^一血而死^一、達^一十卽十生^一故捨^一之。

大阿の事詳しくは不明なれども、法然の『七箇條起請文』中、四十八番目の署名者大阿と、恐らく同一人であらう。尙ほ此書に依れば、日蓮は鎌倉留學の後、一時故山に歸つてゐるが、假令其事ありとしても、ほんの一時のことであつたらう。

(16) 『善無畏三藏鈔』(遺文六)に依ると、道善房は、日蓮の強言に依て(日蓮の見解)法華經を迎へ、釋迦佛を造りなどしてゐるが、精々その立場は諸宗法華の域を出でぬ。従つてそは、彼が依然たる念佛者として他界せることを破する據證とはならぬ。假に若し、彼が純一なる法華者と轉向したとすれば、日蓮の悲歎の言は、出る筈がないからである。

アダム・ファーグスンの市民社會論

陳 紹 馨

ファーグスンは社會理論史のかなり重要な一ランドマークである。ブライジッヒは彼を社會學の最初の組織者となし、グムプロウイッチは彼を近代社會學の父とよび、マルクスは彼をアダム・スミスの師とよんだ。理論家は自己の體系と類似するものを高く評價するもので、ブライジッヒはファーグスンの歴史的な作業を、グムプロウイッチは彼の闘争本能の強調を、それべ重視した。ファーグスンに對する彼等の評價はそのまま受容がたいがなほその歴史的意義を物語る一端となる。ヒューム、スミス、ロバートソン、ギボン等の同時代人としてファーグスンは生彩ある存在であつた。その著書はイギリスにおいて幾度も版を重ねたのみならず、フランス、ドイツにおいても翻譯された。フランスではドルバックが彼を高く評價し、ドイツではヘルデル、シルレル等が彼の影響を受けた。彼は種々の遺産を後世に残したがその體系は併し現在では寧ろ一つの歴史的な存在になつてゐる。獨創的であるよりも寧ろ諸家の學說を綜合集成した彼の體系は當時の思想傾向、殊に啓蒙主義から經驗的實證的科學への過程を示すものであり、社會理論史の一段階の典型的なものであり、殊に社會理論史上的重要な

概念である。市民社會の検討に當つて看過され得ないものである。

—

ファーグスンの名聲を高からしめたものは『市民社會史論』（一七六七年）である。本書によつて彼の體系の概要を伺ふことが出来る。

開卷第一にファーグスンは所謂自然狀態説を批判した。人間は現在のやうな社會生活に入る前にエデンの樂園の生活をしたとある學者は謂ひ、自然狀態における人間は他人に對して狼であつたと他の學者は教へる。これらは共に學者が頭腦で創造した狀態にすぎない。第一に自然不自然の區別そのものが既に自然的ではない。自然是一定飛びすることなく歩一步と進化する。人間の社會生活も聯繫的な漸次的な發展過程で、自然狀態から社會生活に飛躍したものではない。子供が生れるのは既に社會を前提する。社會があつて初めて子供が育つのである。『人間は社會に生れ、そして社會にとゞまる。』『世界各地から集められた新舊の記錄共に人間を群や仲間に集合するものとして記述し、個人が他に對して對立することが出来るのは彼が愛情を以てある集團に入ることにある……としたら、これらの事實は人間に關する我等の總ての研究の基礎として取入れられなければならない。』⁽¹⁾ 人間を科學的に檢討するに當つて先づ第一に人間性を考察しなければならない。人間は本質的に活動的であり向上完成をめざすものである。動物は本能的にその力を發現し行使する性質を有つてゐる。獅子や虎はその足を弄び、馬はその蠶で風を切る。角の未だ生へない牛や山羊さへ遊戯において頭を以て相手につつかゝる。人間はその推理力や能辯や體力にその力を表現し、仲間をねきん出ようとする。⁽²⁾ 活動的な人間にとつて無爲は一大苦痛である。無爲は戰場の勇士を殺すに足る。多くの人は戰争を娛樂視し好んで危險や困苦に身をさらす。難關を乗り切る政治家や水夫の心情もこれに類するものである。『このやうな人々は快樂よりも苦痛を好むわけではなく、能力と決斷とを繼續的に行使させる押へきれない天性によつて誘發されたのである。彼等はその鬪争の最中において勝利し、彼等の活動の機會の消失した時に衰弱し凋落する。』⁽³⁾

人間行爲はこの活動的な本能に基くもので冷い理性や打算によるものではない。『人間は對象の重要性に比例しない熱心を以て仕事に從事する。彼等が對立に立ち或ひは徒黨を組む時、彼等は唯行爲への口實を望むものである。憎惡に熱中して彼等はその爭鬭の目的を忘れ、或ひはこの目的に關する正常な推理において唯彼等の假託を望むのみである。ひとたび心が燃へ上る時いかなる熱慮もその焰を壓へることが出来ず、その熱情が冷却した時いかなる推理も雄辯もその以前の情緒を喚起することが出来ない。』⁽⁴⁾ スポーツマンが遊戯で好んで困苦に身をさらすことを見る時人間の幸福をその被る艱難の程度で測るのは妥當でないことが知られる。生氣横溢する青年は冒險そのものを愛するもので力に對する報酬を望むものではない。狩の角笛が鳴り獵犬が吠へたる時に獵師は勇み立つ。進軍の喇叭と共に兵士は我を忘れて突進する。彼等は利益のためでも何のためでもなく、唯彼等の内にみなぎる力を發露するのみである。人間は安易や幸福を希求するものではない。彼等の力を發現し、現在

有つてゐるものよりもより高いものに向つて追求すること、これが人間の天性であり、彼等の行為の原動力である。(5)

人間の活動的な性向は社會生活において具體的に結合及び反撥の本能として現れる。『人間は常に群や仲間のうちに一致しつゝ或ひは争ひつゝさまよふか或ひは定住する。彼等の總ての集合の原因は親和或ひは結合の原理である』(6)。社會生活において人間は單に結合し親和するのみならずまた反撥し抗争する。結合と反撥との兩本能は矛盾するものであるが、具體的な人間生活において兩者は不即不離の關係にある。力の表現や闘争は社會内において初めて可能である。結合は反面において反離であり、分離は反面において結合である。分離は我等の左袒する集團の權利を擁護するためにおこる。『共同の危險に對する感覺や敵の襲撃は、ある國民の構成員を一屬堅固に結合し、市民的な軋轢が齎しがちである分離や現實的な分派を防ぐに役立つ。』(7) 國民の競争や戦争は市民社會の形成や組織の根本的原因である。各人は心のうちに愛と憎惡の種子を有ち、友人と敵を有つ。人間は天性上結合的であると共に分離的である。今までの理論家が主として結合或ひは反撥の本能の一方を強調したのに對してフーガスンは兩者を謂ば辯證法的に把握したところに大なる特色がある。

分離本能は、力を表現し仲間を凌駕しようとする人間の天性からの當然の歸結である。それのみでなく、人間の本性から見て分離本能は結合本能よりも一層根強く且つ一層重要である。反撥や闘争は單に戦争の場合に起るものでなく、最も平和な状態においても各人はその敵を有つてゐる。闘争本能が旺盛である限り人間は内において

フーガスンを近代社會の父とよんだのはこの反撥本能の強調のためである。

人性論を基礎としてフーガスンはその社會理論の體系を敍述した。彼の體系は近代社會學のやうな組織學的なものでなくその書名の示す如く社會の歴史であつた。併し近代社會の取扱ふ問題にひとわたりふれてゐる。社會の考察に當つて彼は社會の外的な自然的條件にも言及してゐる。氣候や地勢が人間心理や思惟に影響を及ぼし、ひいて風俗や慣習學問藝術などに影響を及ぼすことを彼は看過しなかつた。その他人種や人口の問題にも論及してゐる。併し彼は外的條件の他に社會の事實を認識しこれを重視した。

フーガスンは社會について確定的な規定をしなかつた。『複數の人間が存する處に社會が存する。そして、社會の内には部分の區分と共同の目的或ひは結果のための多數人の協同が存する。』『社會なる名稱は單なる家族、部族、少數の友人の仲間及び國民や帝國に、與へられる。これらの各々は人間の集團である。』(8) この言葉から見れば彼は社會を形式的な概念に規定してゐるが、彼の敍述は併し綜合社會を主題にしてゐる。彼は綜合社會の構造を組織的に扱つてゐないが、その重要な問題にふれてゐる。彼は綜合社會の下構である經濟生活を主として取扱ひ、それと共に、文學美術知識などの上構にも論及してゐる。こゝで興味のあることは彼が上構と下構の問題にふれ、上構を全體的な社會生活から規定し説明してゐることである。藝術や學問は一見世俗的活動から解放された閑暇や安靜より生れたもののやうに思はれるが、事實これらは人間の生き々とした活動から生れたもので

ある。實生活から遊離した學藝はつひには凋落するに至る。⁽⁶⁾ 歴史家がその見聞した事件に感激しこれを反省や熱情を以て敍述する時、大事件に當面し大政治家が公衆の面前で事件を検討する時、會話が擴大され精煉され、人間の社會的感情が著作に向ふ時に、學藝の體系が活動的な生活のうちから生れる。社會自體は一つの學校でありその課題は實生活に由來する。したがつて學藝の盛衰は全體的社會狀態如何による。外に強く對立してゐるスバルタ人にとつて強壯な人民の養成が最高目的であり、總てのものはこの規準に照して評價される。直接武勇を鼓舞するに役立たない藝術はスバルタ人にとっては炊事と同等の價値を有するものにすぎなかつた。アテネが學藝の都であつたのに對してスバルタには勇士の事蹟を記述した若干の詩文が存するにすぎなかつた。

『市民社會史論』の主要部分は社會の發展史の記述である。社會は未開社會 (rude society) から開化社會 (polished society) へ、或ひは蒙昧 (savage) から野蠻 (barbaric) をへて文明 (civility, civil society) へと發展する。最初の段階である蒙昧社會では成員の數少く且同質的で結合は強固である。私有財產は未だ存しなかつた。不平等も殆ど存せず個人間の自然的能力の差異があるのみである。生計は主として現前の直接的なものに向ひられ未來に對する考慮は行はれないのが常である。農業の行はれる處では性別による分業が行はれた。私有財產が存しなかつたのでそれを保護する政治組織も發達しない。科學も存せず、藝術も未發達である。小集團間の争ひはあるが鬭争はそれ程激しくなかつた。原始的な社會は漸次に増大し集團間の争ひが頻繁になつた。戰場の勇士は平常は一般の人と同じ生活を營むが併し衆人の尊敬を受け種々の特權を享受した。他方において技術が進歩した。

未開時代は野蠻社會である。野蠻社會は階層的な關係を成立するに至つた。この段階が野蠻社會である。野蠻社會における頻繁な鬭争の結果弱小の集團は征服兼併されて平和が保たれるに至つた。人間は性來その力を表現し自己を向上せしめんとする本能を有つものである。個人は富を望み卓越を希求する性質を潛在的に有つてゐるが、初めは他集團との鬭争や個人の英雄的な行爲に心を奪はれて個人的利益を顧慮するいとまがなかつた。ひとたび社會の平和が確立されると共に個人は私利私益にめざめ、そのため相争ふに至る。集團外に對する鬭争は今や集團内における鬭争に轉化するに至つた。⁽⁷⁾ これが文明社會或ひは市民社會である。分業の發達と共に私有財產は發達し、從屬關係は確立され、市民社會は複雑な發展の道を辿つた。

原始時代において財産は元則として共有であつたが若干のものは私有であつた。小屋と家具は家族の私有であり、毛皮と武器は個人の私有であつた。親は子供の生活を安全にするために漸次餘剰の食料を獲得し保存する。個人もまた必要のために或ひは競争や嫉妬のために自己の利益を顧慮するやうになり、その能力を種々の仕事に注いで餘剰物質を獲得するやうになつた。かくて種々の私有や交換が行はれ、財産が構成されるに至つた。⁽⁸⁾

未開時代において戰場の勇士は最も尊敬された。彼等は戰利品の分配に當つて大なる分前を獲得した。彼等の特權的な地位はその私有財産の蓄積に便宜を與へ、肉體的な優越と物質上の餘剰は益々彼等の地位を高めた。榮譽と財産とが相續されると共にこれら的人は支配者の地位を獲得し、社會に於ける從屬關係が確立されるに至つた。

野蠻社會より文明社會（市民社會）への推移に當つて既に私有財産は構成され從屬關係は確立されたが、文明社會（市民社會）における分業の發達は社會を急速に轉化發展せしめた。必要に強ひられて或ひは有利な状勢や政策のために人間生活は大なる進歩をとげたが、分業が發達するまでは近代社會の飛躍は現れなかつた。未開社會において既に性別による分業が行はれたが、社會が戰爭狀態から平和狀態に入り交換が行はれると共に獵夫や戰士は商人に變つた。生活資料の不平等な分配を齎す偶然的な事件、個人性向、機會などが各人に異つた職業に就かしめる。そして效果の觀念は彼等を驅つていよ／＼職業の區分を行はせる。⁽¹²⁾ 分業は所謂社會的分業と技術的分業の兩方面を含む。軍事と政治とは異つた個人によつて從事され、また軍人は更に種々の兵種に區分される。他方製造業者はその生産過程を細分することの有利なのを發見し、消費者も分業的作業による優良品を受用するに至る。分業は個人並びに社會の富を増進せしめ、學藝を興起せしめ、人間生活に絶大な進歩を齎したのである。分業によつて個人的分化が促進され個人間の經濟上の不平等が顯著になつた。それと共に社會上の上下關係が甚だしくなり、この關係を統制する組織即ち法律や國家が發生した。商業の技術が人間の動物的性質の必然に由來する如くに、政治的な技術は本能的な社會の要求や缺陷に由來するものであり、戰争や內的鬭争や商業社會の必要に應じて發達したものである。『政治の偉大なる目的』は『家族に衣食と居住の手段を保證し、勤勉な人がその業務に從事するのを保護し、警察の拘束並びに人間の社會的心情を彼等の相違する私の追求について調和せしめることである。』⁽¹³⁾ 『政府の第一次的な目的は……その臣民の財産を保全し、勤勉な人がその勞働の果實を收ら生じたものである。』

分業はかくの如く近代の市民社會を成立せしめた根本的な動因で人類進化に絶大な意義を有つものであるが、反面においてまた弊害を齎した。分業において各人は自己の特殊的な仕事に局限されて全體に對する視野が失はれる。仕事は形式的機械的になり、獨創や個性は窒息せしめられ、多數の人が無知になる。他方生活の分化と共に社會全體の關聯は複雜化して全體の見透しが困難となり、社會は社會的精神を有たない諸部分によつて構成されるに至る。⁽¹⁴⁾ 分業は貧富の懸隔を顯著ならしめる。大多數の貧者は彼等の生計のために全力を奪はれて社會進歩のために働くことが出來ず、富者は發達する產業や商業に刺激されていよ／＼利益を追求する。經濟的な利益の對立は貧者と富者の對立を齎し、未開社會における對外的鬭争は平和な市民社會において社會内の鬭争となるに至つた。『ある國民がある時代に保持する熱情や生氣は國民的精神の尺度である。これらのものが活氣付けなくなつた時に國民は衰へ、これらのがかなり永い期間に渡つて等閑に附せられる時に、國家は没落しその國民は頽廢せざるを得ない。』⁽¹⁵⁾ 橫溢せる國民精神こそ社會發展の根本動力である。社會が對外的に鬭争し奮闘する時に進取的精神は最も旺盛であり、したがつて社會は發展する。市民社會に至つて平和が保たれ、人間が彼等の當然受くべき奮闘の結果を享受する。この安易が人間の鬭争的精神をぶらし、浪費に向はせる。また

といひ闘争的・精神が發揮せられる場所じめやれば私利私益の獲得に回るゝのみ。既述の社會内におけり獨立心闘争的精神の衰退が社會沒落の原因なり矣。

- (1) Ferguson, A.: *An Essay on the History of Civil Society*, 1767, p. 4.
- (2) Ibid., p. 35.
- (3) Ibid., p. 67.
- (4) Ibid., p. 325.
- (5) Ibid., p. 67—68.
- (6) Ibid., p. 23.
- (7) Ibid., p. 32.
- (8) Ferguson, A.: *Principles of Moral and Political Philosophy*, p. 21, qu. from Lehmann, W. C.: Adam Ferguson and the Beginning of Modern Sociology, 1930, p. 155.
- (9) Ferguson, A.: *An Essay on the History of Civil Society*, p. 262, 174.
- (10) Ibid., p. 191.
- (11) Ibid., p. 146.
- (12) Ibid., p. 276—277.
- (13) Ibid., p. 220.
- (14) Ferguson, A.: *Principles of Moral and Political Philosophy*, p. 426, qu. from Lehmann, W. C.: op. cit., p. 147.
- (15) Ferguson, A.: *An Essay on the History of Civil Society*, p. 279—280, 334.

II

(16) Ibid., p. 322.

(17) Ibid., p. 316, 345, 332.

近代精神生活の基調は啓蒙主義である。リバーリーがその萬有引力説によつて原因、事物及びその力に關する總じの假説を排し、唯觀察可能な現象の數學的な敘述のみを以て地球及び天體に關する統一的な體系を構成し、かく、數學的・自然科學は支配的な思惟模型となつてながく歐洲の思想界を支配した。社會理論にもとの數學的・自然科學の方法が適用され、所謂近代の自然法論や社會契約説などが生れた。人間認識はその生活に基く認識であつて、生活の發展と共に益々具體化實證化されて行く。近代の市民社會に現れた啓蒙主義は中世の神學的な世界觀に對して既に一段の進歩であるが、啓蒙主義の發展過程においてその根本命題は益々實證化されて行つた。かつて社會の發展は神の攝理によつて説明されたが今や『自然秩序』によつて、『人間性』によつて、或ひは『見えねえ手』や『理性の狡智』によつて説明されるに至つた。理神論はヨコハ哲學批判の有力な第一聲である。世界を創造したのは神であるが、一旦事業が完成された後に神は世界から手を引き、世界は時計のやうに直の進行する。萬象の運行は今や神の指圖によつてものでなくして事象の自然的必然性によつての解されるに至つた。『法則』はもはや道徳的命令を意味するものではなくして自然事象の自然的必然性によるものとなつた。宇宙の統一的な秩

序は人間社會において『自然秩序』として現れる。これは天體のやうに自ら調和するものである。重農學派の自然秩序は尙形而上學的な色彩の濃厚なものであるがその世俗化の努力は繼續された。コンドルセーは一層世俗的な人間性や人間精神の進歩の理論を以て歴史發展を説明した。アダム・スミスに至つて社會の祕密は維然見えざる手として残つてゐるが併し經濟生活の具體的検討によつて人間共存生活の理論は著しく實證的になつた。

啓蒙主義の一般的特徴は理性の獨裁を宣揚し、事物を抽象的無歴史的に考察することである。併し啓蒙主義の發展過程中に同時にそのアンティテーゼが發展した。シャフツベリー、ルソーの如きは理性に對して感情を強調し、ヒューム、モンテスキュー等は歴史的具體的考察を重視した。社會事象をありのまゝに認識しようとするにはその理性的な要素と共にその感情的な要素、その歴史的な具體的な形態を把握することが必要である。これは近代科學の方法であるが、十八世紀の末葉は啓蒙主義から近代科學への過渡を示してゐる。ファーグスンは社會理論におけるこの過程を典型的に表示する人である。

ファーグスンも彼の時代の子であつた。彼は『自然の法則』について論じ、『自然の創造者』について語つてゐる。⁽²⁾ 社會の窮極的調和の思想も彼において顯著であつた。⁽³⁾ 併し彼は意識的に啓蒙主義に反抗し、近代的社會科學に近く肉迫してゐる。科學的研究は想像や思辯に頼るべきものでなくして具體的な資料によるべきものである。科學者は組織的な體系を立てるために事物の窮極的原因を設定しそれから演繹を進めるのが常である。自然狀態説がその一例である。だが存在の根源に至るまで自然の祕密を追求するのは愚かな望みである。我等は體系構成よりも個別的研究に立ち入らなければならぬ。社會事象は複雜であつてこれを單純な要素に還元することは困難である。事物の性質はそのありのまゝの機能について考察さるべきもので不自然な或ひは例外的なものについて斷案を下さるべきではない。たまゝ森の中で發見された獨棲の未開人を以て未開人の生活一般を推測するのは早計である。⁽⁴⁾ この實證的な精神を以て彼は自然狀態説を批判し、社會生活における感情的本能的要素の重要なことを指摘した。『何處から來何處へ吹き去らうとするかを我等が知ることの出來ない風と同じく、社會の形式は茫漠にして幽遠なる起源に由來するものである。社會は哲學の出現よりもずっと前に、人間の思辯からではなくしてその本能から生起した。』『多衆の總べての行爲や運動は、所謂開化の時代においても、未來に對して等しく盲目である。』『一致によつて形成された憲法なく、プランから模造された政府はない。』⁽⁵⁾

啓蒙主義は理性を以て總てを律し、個別的事物よりもその理性的な原理をめざすもので、したがつて無歴史的傾向を有つ。ところが啓蒙主義の發展過程においてそのアンティテーゼたる歴史的傾向がモンテスキュー、チュルゴー、ヘルデル、コンドルセー、ヒューム等に現れた。等しく歴史的傾向と稱しても時代や社會狀態によつてその實質的内容が相違する。ファーグスンも歴史的考察を強調した一人であるが彼の體系はフランスやドイツのそれと實質的に相違してゐる。ヘルデルもチュルゴーも歴史を論じ歴史過程における地理的或ひは生物學的要因を検討したが、彼等の目的は世界史或ひは普遍史の『意味』の探求であった。彼等は歴史を精神の發展として、プランとして考察し、その方法は目的論的であつた。要するに彼等の歴史は歴史哲學であつたのである。これに

對してハーベスンは、歴史そのもののではなくして歴史過程を研究した。彼は歴史の意味ではなくして連續を、目的ではなくして由來を、プランではなくして力を探求した。當時のイギリス人の著書の題名によく現れる自然史、といふ名稱はその内容を適當に表示するものである。^①

科學研究において注意すべき点は、ハーベスンは次のやうなことを指摘している。詳細な研究のかなりに過度に體系を要するんじて、得意の觀念をよりまではすこし、窮屈的な基礎に到達しようとしないで深い思辯に夢中になること、經濟的分析的方法の限界を忘れて想像をたくひます」と、假説を眞實と、想像を推理と、詩を科學と混同すること、個人的偏見、科學的偏執、自己の多少偶然的な經驗を一般化するんじて、國民的偏見、即ち自國の文化を評價の尺度とするんじて、書籍を生活ととり違く、圖書館を社會の實驗室ととり違くするんじて、新しい術語や新形の記述を新しい概念や發見にまわがくするんじて、歴史的記述などにおいて言葉の意味や内容の變遷を看過するんじて（たゞくは royal や noble ふらの言葉はシャーネンの時代とルイ十四世の時代とにおいてその意味内容が相違するが如き）、歴史的歸納的研究のかはりに思辯的先驗的研究をするんじて、單に時間的に前後して起る事實を原因結果として斷定するんじて、早急な一般化をするんじて、一部を以て直ちに全體を推すが如き）、事物の事實やペリクレスを以て總てのギリシャ人を推す、アーチェストを以て總てのロシヤ人を推すが如き）、事物の事實や繼續を確立するかはりにその起源を追求するんじて、人間の心の能力を獨立な機關や機能と考えるが如き抽象に陥るんじて等。^② 彼は事物を觀察する時にその全體的關聯を看過しない。社會の研究においてその獨創的な事實を

強調しながらもその自然的條件を等閑に附さなかつた。個人を彼は常にその綜合社會的關聯において把握した。

人間の結合的及び分離的本能のメリケートな關係や分業の促進的並びに破壊的な方面に對する深い洞察は卓見であつた。彼はその同時代のハーベスンの學者や後輩たるアダム・スミスよりも方法的に遙に實證的であつた。^③ 啓蒙主義的社會理論より近代的社會科學への過程は彼において顯明に現れてゐる。

(1) オッペンハイマによればヘーゲルの理性の狡智はスミスの見えざる手の哲學的表現である。 Oppenheimer, F. : *Richtungen der neuern deutschen Soziologie*, 1928 S. 8.

(2) Ferguson, A. : An Essay on the History of Civil Society, p. 295.

(3) Ibid., p. 87, 82. cf.

Lehmann, W. C. Adam Ferguson and the Beginning of Modern Sociology, p. 158, 164.

(4) Ferguson, A. : An Essay on the History of Civil Society, p. 5.

(5) Ibid., p. 187, 188.

(6) Lehmann, W. C. : Op. cit., p. 232.

(7) Ibid., p. 170—171.

(8) Dunning, W. A. : A History of Political Theories from Rousseau to Spencer, 1922, p. 65.

III

思想史上で最も興味深く轉向點を示すハーベスンは社會理論史上においてかなり重要な地位を占めてゐる。

る。彼は社會を獨立なテーマとして取扱つたのみならず、後代の社會學主義を想起せしめる程に社會の意義を強調した。⁽⁴⁾『人類は、彼等が常に保持する集團において考験されなければならない。個人の歴史は、彼がその種族に關聯して享受した感情及び思想の細目にすぎない。したがつてこの點に關する總ての論究は全社會についてながるべきで單獨の人間についてながるべきでない。』⁽⁵⁾『善惡の區別を證示する唯一のものである社會は、善惡の知識の木が植ゑられた神の國とも考へられる。それにおいて人間は、その果實の間にあつて區別をなし選擇をなすやうに運命付けられてゐる。』⁽⁶⁾勇氣や愛や同情は社會において發生する。分離や對立も社會において初めて可能である。單に社會を重視するのみならず彼は更に進んでその具體的な歴史的形態を把握して諸種の事象を明瞭に説明してゐる。ギリシャでは戰場で盾を失ひ或ひは敵に背中を見せるのは恥辱であるが、スキチヤでは戰鬪は戰爭の一の戰術にすぎない。ギリシャでは音樂や舞踏は才藝に數へられるがローマではこれらは奴隸の仕事である。昔の人にとって貴族は軍事的な能力を有つ人であつたが現在のヨーロッパ人にとつて貴族とは由緒ある家系に屬するもののことである。才能は家柄に代ることは出來ないかと現在の貴族に尋ねるなら、才能はある貴族をその等族の内で卓出せしめるが百姓や商人を貴族に上らせるものではない、と彼は答へるであらう。これに對して民主主義的な國家の人にとっては、同じ能力を有ち等しく社會に奉仕してゐながらあるものが他よりも地位が高いといふことは考へられないところである。これらの事實は綜合的な社會について初めて説明され得る。⁽⁷⁾一定の技術や藝術は社會の一一定の發展段階において初めて現れるものである。それらは人間の全體的な生活の一

契機であつて人爲的に分離し移植し得るものではない。一社會が他の社會から技術や藝術を受入れるには、その社會で既に技術や藝術を受入れる素地が出來てゐて初めて可能である。⁽⁸⁾このやうな鋭い社會學的洞察は現代の體系のあるものよりもずっととすぐれてゐると謂はなければならぬ。

中世的な教會から近世の世俗的國家を解放する努力はホップス等の社會理論として現れたが、市民階級の絕對國家からの解放の努力はホップス等の理論に對する批判として現れた。他方社會生活の發展と共に社會理論は實證化されて漸次に近代的形態をとるに至つた。絕對國家的な理論に對する批判をゾムベルトは『人間社會の自然論』(Naturlehre der menschlichen Gesellschaft) ふんだ。⁽⁹⁾これは政治的には絕對國家に對する市民階級の反抗であるが理論的にはホップス等の分子論的な合理主義的な理論に對する批判である。ホップスの社會理論は歴史的現實や眞理をめざすものではなくて理想國家を可能にし正當化する理念であり、構成的假說であつた。それに対して社會自然論は共存生活の現實を、その意味ではなくしてその存在を、把握しようとした。⁽¹⁰⁾自然狀態説は共存生活について種々の想像をたぐらますが、人間は獨存し得るものではなく、子供の生産や養育は既に社會を前提してゐる。人間は先天的に社會的本能を有つもので、社會は人間によつてある時期に構成されたものではなく人間と共に存在するものである。これは十七八世紀の英佛の學者の一般的見解であつた。⁽¹¹⁾精神的なものは心理的なものに、理念的なものは心理學的なものに解消された。總ての理念は社會的要素から導かれ、社會生活はその歴史的發展及び心理學的動機について考察された。約言すれば、方法が實證化され社會が重視されたのである。

ファーダグスンはこの社會の自然論の集成者であつた。⁽⁶⁾

ファーダグスンの後に歐洲の天地は產業革命や政治革命の動亂の巷となり、自由主義的、復古主義的、社會主義的イデオロギーが入り乱れて争ひあつた。十九世紀の三十年代にイギリス、フランスの社會がやゝ安定し、近代的な生活關係が刻明に現れた後に、人間共存生活の綜合的考察がコントやマルクス等によつてなされた。コント、マルクスとファーダグスンとの間には產業革命とフランス革命とはさんで約七十年のへだたりがある。前者と後者との比較は十八世紀後半の社會自然論と十九世紀前半の綜合的な社會理論との對照を明かにする。

コントの社會學とマルクスの唯物史觀は同じ歴史的段階の產物として幾多の共通的な契機を有つてゐる。第一に兩體系共に實踐的意圖に基くものである。コントは知識改造によつて社會の安定を圖らうとし、マルクスは無產者との鬪争によつて社會の變革を齎さうとした。次に兩者共に社會の綜合的認識を強調したことである。コントは社會の全體的關聯に着眼しなければその個別的認識は不可能であると説き、マルクスは社會認識における全體關聯的發展的方法を提倡した。第三に兩者共に體系に社會構造論（社會靜學）並びに社會發展論（社會動學）の兩部門を定立し且つ後者を重視したことである。コントは社會靜學を比較的輕く扱ひ『實證哲學講義』の大部は社會動學論であるが、併し彼の比較的等閑に附した社會靜學は相當重大な意義を有つものである。彼において社會概念並びに社會構造の規定が充分でなかつたために彼以後の社會學の努力は主としてこの方面に注がれた。この傾向を徹底せしめた形式社會學に至つて社會學は社會概念或ひは社會構造を本來の課題とし、コントの重視した社會動學が社會學プロペーから除去されるに至つた。彼の社會靜學は簡単に且つ不完全なものであるが、

この問題の組織的な取扱ひは前段階の社會理論に見られなかつたところであり、この點において學史的に相當意義の深いものである。マルクスの研究は主として社會の具體的な歴史的發展に向けられた事物のありのまゝの姿が認識の目的である限り研究は當然かくあるべきである。併しその際社會構造論は決して看過されたのでなく、常に彼の頭の内にあつて研究の指針となつた。蓋し明確な社會構造論を有つて初めて明確な社會發展論が可能であるからである。第四の共通點は、兩者共に上構下構の關係を中心的なテーマの一つとしたことである。コントは社會生活の不安を知識の混亂に基くものとなし、知識の社會生活における決定的意義を説いた。マルクスは知識を物質的生活關係の反映となし、物質的生活が知識を決定することを論じた。

ファーダグスンはプラッターマティカルな立場に立つて生活のための認識を提倡したが、⁽⁷⁾ 彼の體系にはコントやマルクスのやうな強烈な實踐的意圖が現れてゐなかつた。彼はスミスと共に產業革命の直前に生活した人であつたが市民階級的な要求は彼においてスミスにおける程に強く現れなかつた。既存の學說を綜合集成したところに彼の特色がある。社會を綜合的に認識しなければならないことを強調した點はコント、マルクスに似てゐる。彼は著書の諸處において社會構造を取扱つてゐるが併し社會構造論を獨立のテーマとなすに至らず全體の體裁は社會發展史であつた。コントとマルクスにおける社會靜學と社會構造論は前段階の社會理論と區別される重要な標識の一つである。ファーダグスンは物質的生活關係と精神生活との兩方面を論じ且つ後者が前者によつて規定され

なんらかの程度まで闡明しある。この問題は當時並びにそれ以前の英佛の學者が取扱つたといふのであるが、明確な問題となつたのは産業革命及びフランク革命以後のものである。ハーネス革命の過程中フランク國家は幾度も組織をかく種々のイデオロギーが宣揚されたが民衆の生活はせして影響を受けることがなかつた。これに反してひとたび人々のベンガルやカタールや民衆は動搖した。他方において傳來的な教説や道德は新しい生活關係において通用しなくなつたのみならず寧ろ滑稽なものになつてついた。かゝる状勢が人間に物質的生活關係と精神生活との關係について反省せしむれを重要な問題の一つたらしめた。フーアーヴスン・コント、マルクスとの間じんの點について時代の経過が明瞭に現れてゐる。

氣候と地理的環境、人種、人口、社會的本能(結合と分離の本能)、技術、分業、社會制度、群集、模倣、流行、言語、科學、文學、美術、宗教、道德、社會進化等現代社會學で取扱はれる問題は殆どフーアーヴスンの著書に網羅されしる。個別的な問題のへや闘争説と分業論と社會型の進化の理論は從來の社會學に取入れられてゐる。斯くてフーアーヴスンの體系はコント、マルクスの體系に幾多の類似點を有つてゐるが後者のやうにパックトな明確な體系をなしてゐない。兩者の間には現代生活のシャッターを切つたフランク革命と産業革命が介在してゐるのである。

(1) フーアーヴスン以前に社會を獨立のテーマとして取扱つたものに次のやうなものがある。

Wolff, C. : *Vermünftige Gedanken von dem gesellschaftlichen Leben der Menschen*, 1721.

Mandeville : *A Search into the Nature of Society* (Appendix to the 3rd ed. of the *Fable of the Bees*), 1723.

Buffier : *Traité de la société civile*, 1726.

Burke, E. : *Vindication of Natural Society*, 1756.

次記の二書はフーアーヴスンの市民社會史論と同じ年に現れた。

Méritier de la Rivière : *L'ordre Naturel et Essentiel des Sociétés Politiques*.

Linguet, N. : *Théorie des Lois Civiles ou Principes fondamentaux de la Société*.

(2) Ferguson, A. : *An Essay on the History of Civil Society*, p. 6.

(3) Lehmann, W. C. : Op. cit., p. 54

(4) Ibid., p. 75.

(5) Ferguson, A. : Op. cit., p. 259, 261.

(6) Soubarf, W. : *Die Anfänge der Soziologie*, (Erinnerungsgabe für Max Weber, I.) S. 6.

(7) Umruh, A. von : *Dogmehistorische Untersuchungen über den Gegensatz von Staat und Gesellschaft vor Hegel*, 1928, S. 56

(8) Huth, H. : *Die Bedeutung der Gesellschaft bei Adam Smith und Adam Ferguson*, 1906, S. 24, 25.

(9) Unruh, A. von : Op. cit., S. 66.

(10) Buddenberg, T. : *Ferguson als Soziologe*, (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 123. Bd., 1925) S. 613.

(11) Lehmann, W. C. : Op. cit., p. 283.

Buddenberg, T. : Op. cit., S. 612.

四

ヘーゲルがその客觀精神論で定式化した市民社會の概念は近代社會理論にとつてかなり重要な問題である。ドイツではシュタイン、モールがこの概念を中心として所謂『ドイツ社會科學』を構成した。マルクスは市民社會の批判に彼の問題の鍵を見出した。コントの『實證哲學講義』を讀む人はその社會靜學（第五十講）で說かれてゐる『所謂社會』(société proprement dit) がヘーゲルの市民社會と相似してゐることに氣付くであらう。コントはドイツ語に不自由であったが、フランスに留學したドイツの學徒からヘーゲルの學說を聞いて知つてゐた。彼の『所謂社會』がヘーゲルの市民社會と相似してゐるのは偶然ではない。コントは『所謂社會』を批判して人類社會の概念に到達したが、その際市民社會は一つの出發點であつた。ヘーゲルの定式化した市民社會の概念はショタイン、コント、マルクス等の近代の主要な社會理論の出發點であつたといふことが出来るであらう。市民社會を論じたファーグスンはこの點においても我等の關心を引く。

ヘーゲルの市民社會は欲望並びにその満足のために適用せられる勞働行程の組織である。それは欲望の體系、權利の保護としての司法及び警察と團體をその内容とする。それは社會的原子論の組織であり、萬人の萬人に對する個人的私的利益の鬭爭場である。市民社會に對して國家は道義的の全體、自由の具現である。それは一般的利益そのもの、並びにその中に、實體としての特殊的利益の保護を目的とするものである。市民社會は外的國家社會を論じたファーグスンはこの點においても我等の關心を引く。

または必要或ひは信性的國家である。そのうちに身分の差別、社會的階級の對立が發展するが、この對立を媒介として市民社會は國家に克服される。

ヘーゲルの市民社會の概念は十八世紀の英佛の先駆に依つたものと謂はれども、こゝで十八世紀の英佛の市民社會論に一瞥を與へる必要がある。十八世紀における學藝の發展や新大陸における原始人の生活に關する新しい知識は、社會理論に新形相を呈現せしめた。世人はもはや社會を契約に基いて成立したものと見ないで、人間の存在と共に存在したものと見るに至つた。國家も要するに社會の發達した一形態にすぎない。それは未開社會や野蠻社會に對して政治社會或ひは文明社會と呼ばれるものである。十八世紀の社會理論を綜合したファーグスンによると civil society と rude society と對照されるので polished society とも呼ばれるものである。civil society は分業を基礎とする。分業によつて產業や技術が發達し、富が増加する。富の增加はまた欲望を刺激し利己心を鼓舞し、私有財產制度を發達せしめる。社會の貧富の懸隔が生じ、ついに混亂に陥る。この混亂の統制と私有財產の保護とのために法律や政府が發生する。これがファーグスンの市民社會論の概要である。フランスではルソーがほど類似した見解を懷いた。市民社會は私有財產制度の確立と共に成立したものである。必要によつて技術や產業が發達し、土地の分配や私有が發生する。この私有財產が絶大の害悪を齎したのでその克服のために人間は社會契約を結んで政治體を組織した（人間不平等起源論、第二部）。ルソーやファーグスンの見解はロック、ピューリムやスマスにも存するもので、十八世紀のかなり一般的な見解と見ることが出来る。

ヘーゲルの市民社會は國家と對照せしめられたものであるが、この點をも彼の先駆について見なければならぬ。市民階級の活動が國家に掣肘される時に國家に對する批判が起つた。イギリスにおいては十七世紀の半ば頃に絕對國家に對する反抗が起り、一六四二年に王權神授説の信奉者チャールス一世に對して清教徒革命が起つた。清教徒革命期に現れた理論家、例へばカムバーランドの如きは、『政府は自由に對する束縛である』と述べてゐる。⁽³⁾ 王權神授説に對する再度の反抗は所謂名譽革命（一六八八年）であるが、その後に活動した民主主義的な理論家ロックは、『余の見るところによれば、國家とは、人々がたゞ彼等自身の個人的利益を獲得し、維持し且つ増進せんがためにのみ、組織される人々の社會である。余の名付けて個人的利益と謂ふのは、生命、自由、健康及び身體の安易、並びに外界の物、例へば貨幣、土地、家屋、家具、その他これと類似のものの所有である』と謂つてゐる。⁽⁴⁾ これらにおいて國家に對する批判が現れてゐるが、國家と社會との區別はなほ明瞭に現れてゐない。シャフツベリやマンデヴィルにおいても國家に對する批判と共に國家と社會との對照がなされてゐるが、併し兩者の明確な區別にはなほ到達してゐなかつた。⁽⁵⁾ ボーリングブローカーに至つて兩者の區別が初めて明確に現れた。⁽⁶⁾ フランスでは新興市民階級の要求は重農學派において國家干涉に對するレッセ・フェルの主張として現れた。併し當時の理論家は尙國家と社會との區別を明確に認識してゐない。ミラボーの如きは、社會は先に存在し後に國家が建設されたと謂つて兩者を歴史的に區別してゐるが、併し彼の謂ふ國家は要するに社會の全體のことには他ならない。⁽⁷⁾ 國家と社會との區別或ひは對立の起源が如何なる理論家に存するかを決定するの

はかなり困難である。未だ明確な形態に發展しない理論について斷案を下すのは容易ではない。例へば、ロックにおいて國家と社會とが區別されると謂ふグムプロウイッチの見解に對してバルトは反対してをり、エリネックやバルトがルソーにおいて國家と社會とは區別されてゐると考へるのに對してクーノーは反対の意見を懷いでゐる。⁽⁸⁾ 要するに十八世紀の理論家は發展する社會狀態の觀察によつて萌芽的に國家と社會とを對照せしめてゐるが、未だ明瞭な區別には到達してゐない。多くの場合國家は社會の發達した形態、即ち市民社會と概念されてゐる。

國家と社會とが明確に對立せしめられ、後者による前者の克服が強調されたのは、十八世紀の末葉に市民階級が強力にその權利を主張した時である。トーマス・ペーンは、社會と政府（當時のイギリス系の理論家は政府と國家とを同一視するのが常であつた）とは『單に相違するのみならず、起源を異にするものである。社會は我等の缺乏から、國家は我等の不正から、起る。前者は我等の愛情を結合することによつて積極的に我等の幸福を増進するが、後者は我等の害惡を制限することによつて消極的にこれをなす。前者は交通を促進し、後者は差別を作る。前者は保護者であり、後者は刑罰者である。』と主張した。フランスにおいては、ルソーにおける『一般意志』volonté générale と『全體意志』volonté de tous との對照にヘーゲルにおける國家論に影響を及ぼしたことは明かであるが、一般意志と全體意志との對照を直ちに國家と社會との對照に符合せしめるのは困難である。國家と市

民社會との明確な對照は寧ろ、ルソーの著書にも現れてゐるが殊に大革命時代に顯著に現れた『公民』 citoyen と『人』 homme との對照にある。フランス革命初期の人權宣言は『人及び公民の權利の宣言』として兩者をわざく區別してゐるのは意味のないことではない。マルクスはこれらの概念を批判して、『公民』から區別された『人』とは要するに市民社會の成員に他ならないことを指摘した。⁽¹⁾ フランス革命の經過中に『國家公民性、政治的共同體が、政治的解放者によつてこの所謂人權維持のための單なる手段にまで陥され、⁽²⁾ 公民は利己的な人の使用人に宣言せられ、人間が共同體生物である範圍が人間が部分的生物である範圍にまで墮落し、遂には公民としての人間ではなく、ブルジョワとしての人が、固有の真正な人間であると認められる』に至つた。⁽³⁾ ジュボン・ド・ヌメールの如きは端的に『何物も所有しないものは社會の構成員ではない……國家行政と立法とは所有權の事務である。従つて所有者のみがそれに對して實際の利益を有つことが出来る』と唱破した。⁽⁴⁾ 公民に対する人の優越、政府に對する社會の優越の主張は、共に第三階級の封建階級及び絕對君主の克服の叫びで、實に市民社會は後にブルンチュリが指摘したやうに、第三階級的な概念である。而して前代の理論に萌芽的に存した國家と社會との區別、對立が明確になり、社會の國家に對する優越が主張されるのは、實にこの新しい社會状勢に基くものである。

ヘーゲルの先蹟の市民社會論を瞥見した後に我等はヘーゲルの市民社會論の源泉を推測することが出来る。市民社會は元來歴史的な概念である。ヘーゲルもこれを近世的な現象となしてゐるが、彼はこれをその體系内の一

論理的な概念に取入れた。先蹟における市民社會は物質的生活關係を基礎とする利己的な個人の活動舞臺であるが、ヘーゲルはこれを欲望の體系及び萬人の萬人に對する私的利益の鬭爭場として規定した。先蹟は市民社會に發生した害惡の統制及び私有財產の保護のために法律及び國家が組織されたと說いたが、ヘーゲルはこれを市民社會における司法及び警察として規定した。ルソーやファーダグスンが國家と市民社會とを明確に區別しなかつた⁽¹²⁾ のに對してヘーゲルは兩者を明確に規定してゐる。此點についてもルソー、ファーダグスン以後のフランス革命期における國家と市民社會との對照がその源泉をなしたと見ることが出来る。たゞ英佛とドイツにおける社會狀態の相違が、國家と市民社會とを異つて對立せしめてゐるのみである。有力な市民階級が舊い勢力を克服しようとする英佛において、國家は市民社會に克服さるべきものであるが、有力な市民階級存せず、上からの革命が唯一の救濟策であるドイツにおいては、市民社會は國家に克服されるものである。要するにヘーゲルは十八世紀の英佛の先蹟の理論を綜合集成して市民社會の明確な概念規定をなし、近代社會理論の出發點をなしたのである。

市民社會は第三階級的な概念であつて第三階級がその權利のために抗争する時代の觀念形態である。一八三〇年代に市民階級がその權力を確保し近代的な生活形態がほど整つた英佛⁽¹³⁾においては、市民社會の問題は綜合社會の問題に展開したが、市民階級の發達のおくれたドイツにおいては、それは十九世紀の中葉に至るまで活潑な話題であった。當時の社會理論の主流であるシュークタイン、モールのドイツ社會科學は、ヘーゲルの市民社會を基礎としたものであつた。ドイツにおいても十九世紀の七十年代に近代的な社會構造が發達した時に市民社會概念

は綜合社會概念に發展し、ドイツ社會科學はドイツ社會學に融合せしめたのである。⁽⁴⁾ フランクスではコントはその社會靜學論において社會的生存の諸條件の一つとして『所謂社會』をあげた。彼はこの『所謂社會』の原理を批判して人類社會或ひは人類の概念に到達し、これをその社會學の對象とした。彼以後克服された市民社會は近代社會學において中心的なテーマから遠ざけられたのである。

マルクスはドイツに生れた人であるが英佛に生活し活動して近代の資本主義社會をその地盤とした。彼の理論はその『ハイッヒ・イデオロギー』において批判されたドイツ的形態と區別せぬべきである。（ルの意味におよびマルクスにドイツ社會學の起源を求める）とは、言語及び國籍から謂へばともかくも、理論史から見れば不當な處置である。彼の體系はヘーゲルの市民社會の批判から出發した。彼において市民社會は先づ歷史的な概念であった。『古代社會、封建社會、市民社會は、即ち皆左様な生產關係の總和であつて、その各々がそれと同時に、人類の歴史における特定の發展段階を示したものである。』⁽⁵⁾ 市民社會は欲望の體系であつて、それによつて個人は他に對して何等の關係をも有たない自足的な分子であると概念されてゐる。マルクスはこの概念を批判し、『自然の必要、即ち如何に疎外せられたやうに見えようとも人間の本然の特性、利害は、市民社會の成員を結合する』⁽⁶⁾ ことを發見した。⁽⁷⁾ 一見分子の集合であるが如き近代の市民社會も、その眞相を解剖すればその基礎に物質的生活關係が存するといふが伺はれる。ルのルから推察して、より單純な生活を營んだ過去の時代においても當然物質的な生活關係が共存生活の基礎をなしたことが了解される。⁽⁸⁾ 『本來の市民社會はブル一人として死して現代に生きじゆるのであれ。

ジョアジーを俟つて始めて發達する。けれどもおひる時代にあつて國家及びその他の觀念的上部構造の土臺を形成造るところの、直接に生産及び交通に基いて發展する社會組織は、すつと同一の名稱を以て呼ばれて來たのである。』⁽⁹⁾ こゝにおいて一歴史段階としての市民社會は物質的生活關係としての、或ひは上部構造に對する下部構造としての市民社會に、發展したのである。事物を全體關聯的發展的に認識する）とは唯物辨證法の根本命題である。マルクスは社會の認識に當つてその物質的生活關係と共にその上部構造をも統一的に把握することの必要を強調した。⁽¹⁰⁾ その統一的な全體が即ち彼の謂ふところの社會形態であり、彼の體系の本來の對象である。『舊い唯物論の立場は、市民社會であり、新しきそれの立場は、人類社會或ひは社會的人類である。』（トヨイヨルベッハに關するチーザ、第十）。マルクスにおいても市民社會は克服されて綜合社會が社會理論の主題となつたのである。克服された市民社會は現代の社會學においては殆ど稀にしか論ぜられない。それは一つの捨石となつたが、理論史におけるその深甚な意義は後すぐからわかるのである。而してアダム・ファーチスンは市民社會の理論家の

(1) Unruh, A. von : Dogmenhistorische Untersuchungen über den Gegensatz von Staat und Gesellschaft vor Hegel, S. 60.

(2) 河上豊：資本家的經濟學の發展，（經濟學全集，第一卷，454頁）。

(3) Unruh, A. von : Op. cit., S. 61, 65.

- (4) Ibid., S. 65—66.
- (5) Ibid., S. 90, 92.
- (6) Barth, P.: Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, 3. u. 4. Aufl., 1922, S. 268. Jellineck, G.: Allgemeine Staatslehre, 3. Aufl. 1922, S. 87—88. Cunow, H.: Die Marxische Geschichts-, Gesellschafts-, und Staatstheorie, 1920, S. 126.
- (7) Unruh, A. von: Op. cit., S. 59.
- (8) Jellineck, G.: Op. cit., S. 87—88.
- (9) マルクス：ニダヤ人問題について、(マルクス＝エンゲルス全集、第一巻、426頁).
- (10) 同前, 428頁.
- (11) フオレンダア：マキヤヴァエリよりレーニンまで、服部等譯, 153頁.
- (12) Cunow, H.: Op. cit., S. 126, 116.
- (13) マルクス：資本論，第一巻，第二版跋文高畠譯, 15頁.
- (14) 年報社會學，第一冊，208頁參照。
- (15) マルクス：資本論，(全集，第一巻，681頁).
- (16) マルクス：神聖家族，(全集，第一巻，645頁).
- (17) エンゲルス：フオイエルバッハ論，岩波文庫版，89—90頁.
- (18) マルクス＝エンゲルス：ドイツチエ・イデオロギー，岩波文庫版，128頁，尙69, 74—75頁參照。
- (19) レーニンの史的唯物論，小島譯，74—75, 15, 52頁.

新羅の佛教受容に關する諸問題

江 田 俊 雄

朝鮮に佛教の傳來した歴史を調べるに於いて最も重要な史料は三國史記⁽¹⁾・三國遺事⁽²⁾及び海東高僧傳⁽³⁾の三書である。此の中、前二者は一般朝鮮史籍の上からも古史の雙璧⁽⁴⁾と看做されるもので、夙に朝鮮古代史研究者によつて尊重せらるゝ所であるが、最後のもの僅か一巻を存するに過ぎない零本であるとは曰く、遺事と共に多くの珍しき古記逸傳を引用してゐる點に於いて重要な佛教史研究の史料となはなければならぬ。

乃で、朝鮮に佛教の傳來した記事を見ると、三書何れも半島に高句麗・百濟・新羅の三國が鼎立爭霸した時代⁽⁵⁾には西紀第四世紀より第七世紀の半⁽⁶⁾の高句麗小獸林王⁽⁷⁾11年(1171)からなる。これは佛教が後漢の時代に支那に傳來したのより約三世紀後れてゐる。此の年に、前秦の王・苻堅が浮屠順道と佛像・經文とを王の朝廷に送り、續いで四年(1174)に、僧阿道が來朝した⁽⁸⁾。それで、王は尙門寺を造つて、順道を置き、伊弗蘭寺を建つて、阿道を置いた。これが海東佛法之始⁽⁹⁾であり、高麗佛法之始⁽¹⁰⁾である。苻秦は元來十六